

## 千原真実個展 「風景、片鱗」 報告書

会期：2021年6月30日（水）—8月29日（日） 53日間

\* 予定会期：2021年6月12日（土）—8月22日（日） 62日間

時間：10:00—20:00、火曜休館

場所：熊本市現代美術館ギャラリーⅢ+井手宣通記念ギャラリー

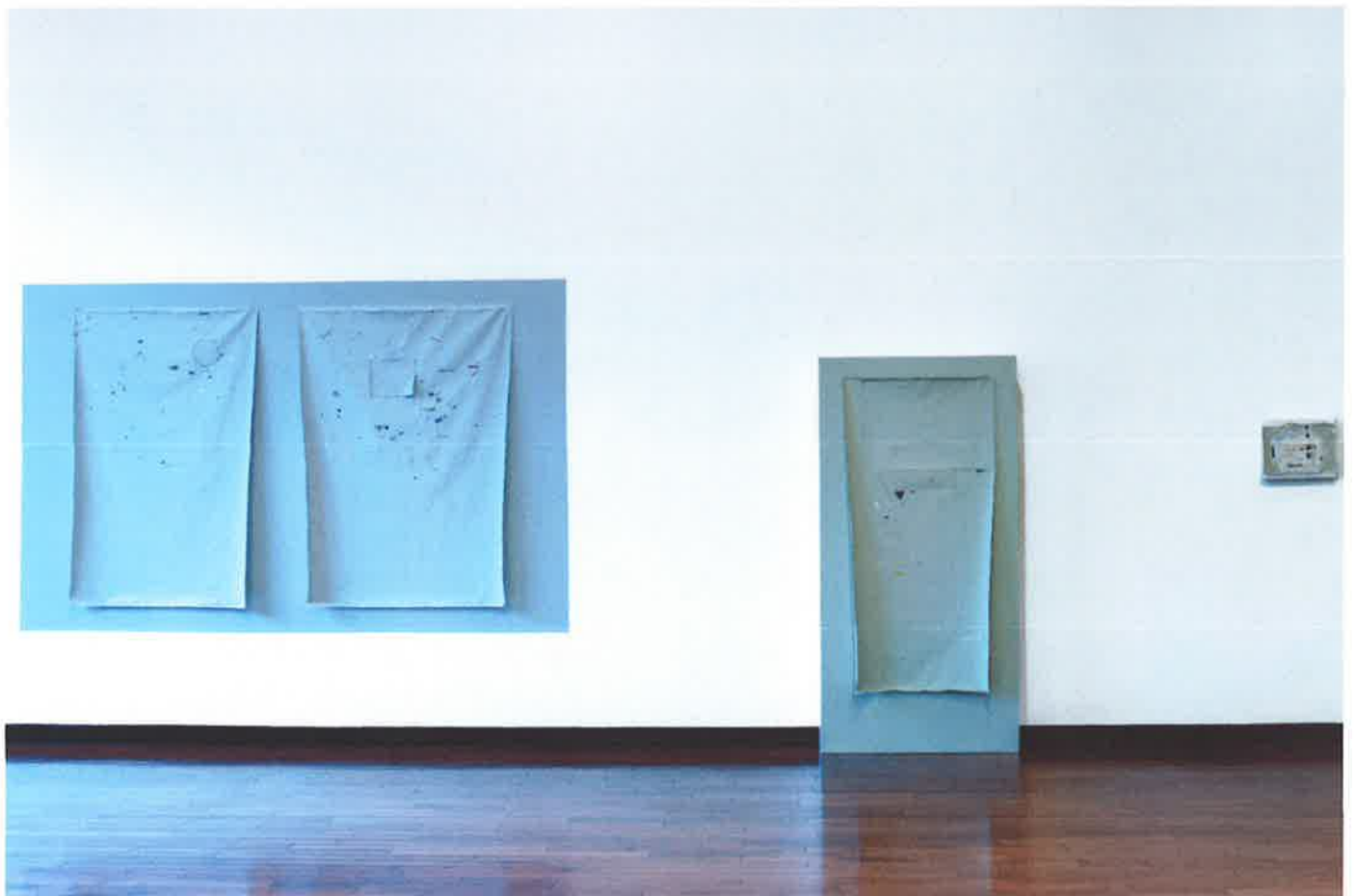
### 事業内容報告：

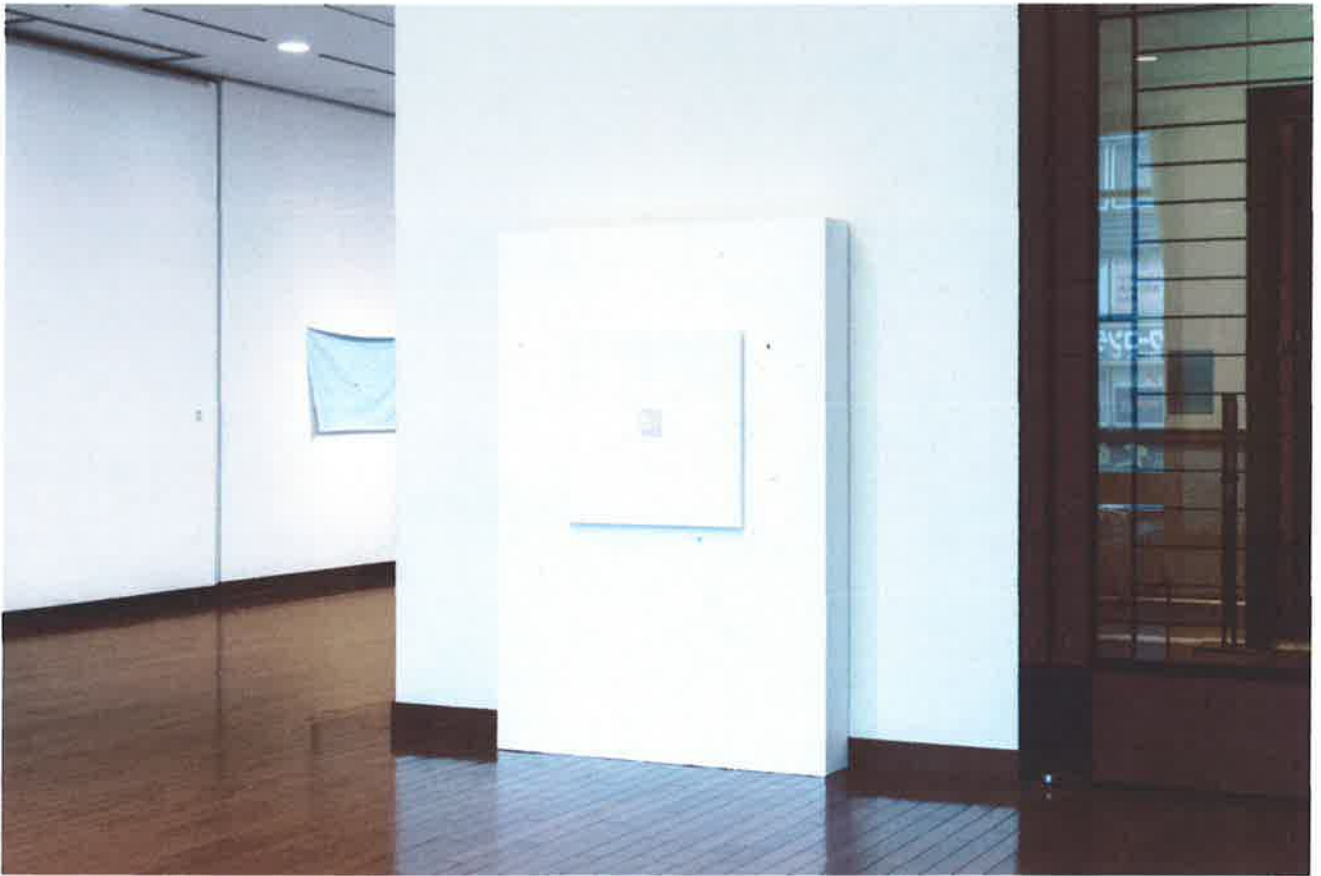
熊本市現代美術館のギャラリーⅢは、九州・熊本にゆかりのある若手～中堅アーティストを紹介するスペースで、その140回目として本展覧会は開催された。当初、6月12日～8月22日の会期を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の第4波に見舞われ、「まん延防止措置」の発令により、熊本市が有する施設は4月28日から臨時休館。その後、熊本県独自の「医療を守る行動強化月間」によって6月29日まで休館が続いた。それにより、本展は6月30日に開幕となった。予定していた開催日数から15日減ったことを受け、美術館が後続の展覧会との調整を図り、8月29日まで会期を延長。結果、53日間の開催となり、5038名の入場者があった。

展覧会は、「絵と絵のまわり」というテーマで制作した近作24点で構成した<sup>資料1</sup>、会場内風景。そのうち新作は11点で、特に今回の重要なテーマである「壁をどのようにコラージュするか」という命題のもとに発表した作品は7点である。これは、2019年に制作した《Surface #1》<sup>図1</sup>を展開させたもので、作品の掛けられた壁は絵画を鑑賞するための「支持体」として認識されるが、作品と地続きであることは紛れもない事実であることから、壁をコラージュ素材のひとつとみなし、自立的に扱う表現を探求したものである。貴財団の助成金により、展示室の壁2面を使用できることとなった。この2面において、約145×200cmの大型のものから30×30cmの小さなものまで、また壁への直接のペイントとそこにコラージュするキャンバス作品の在り方（木枠に張る／張らない）、素材を付した釘を壁に打ったものなど、コラージュの在り方を求めて様々な表現を試みた。また当初から計画していたように、展示室の既存壁と移動可能な壁（カーテンウォール）の2種で展開させた<sup>図2-7</sup>。そのほか、数年前より取り組んでいる同テーマのうち、窓やフレームを作品の構成要素とした作品、ドロ잉も合わせて展示することで、私が取り組み続けているテーマを顕在化できる展示とした。美術館の担当学芸員によれば、「壁」を使った作品は、コラージュ素材としての独立性と等価性がこれまでの作品より顕著となり、絵画の成立条件について問いを強く投げかけるものとなった、とのことである。また展示室のカーテンを開けて外光の入る展示としたため、天気や時間帯によっても作品の表情が変わり、見方・楽しみ方に変化が生じるという報告も得た。

会期中のイベントとして、8月22日に、コラージュを体験するワークショップを企画した<sup>資料2</sup>。着彩したキャンバス片をピンセットで繋げて「線」を作り、コラージュの面白さを体験してもらうという趣旨であった。最終的に成果物は文庫本サイズのブックカバーに仕上げるというもので、小学校低学年から高齢者まで幅広く体験できる内容を計画した。しかし、7月末に感染症の第5波が熊本県を襲い、熊本市現代美術館での参集型のイベント実施が全面的に中止となった（展覧会は続行）。イベント・チラシを作って上通・下通の書店での参加呼びかけを強化していた矢先の事態で、すでに募集人数の半数近く申し込みがあったが、本ワークショップは取りやめの運びとなった。

なお、熊本市現代美術館は特別展の開催に合わせてフリーペーパー『ART KISS LETTER』を発行しているが、本展と同時期に開催された「テオ・ヤンセン展」を取り上げる第99号が通常よりも紙面数の多い仕





会場内風景



图1 《Surface #1》

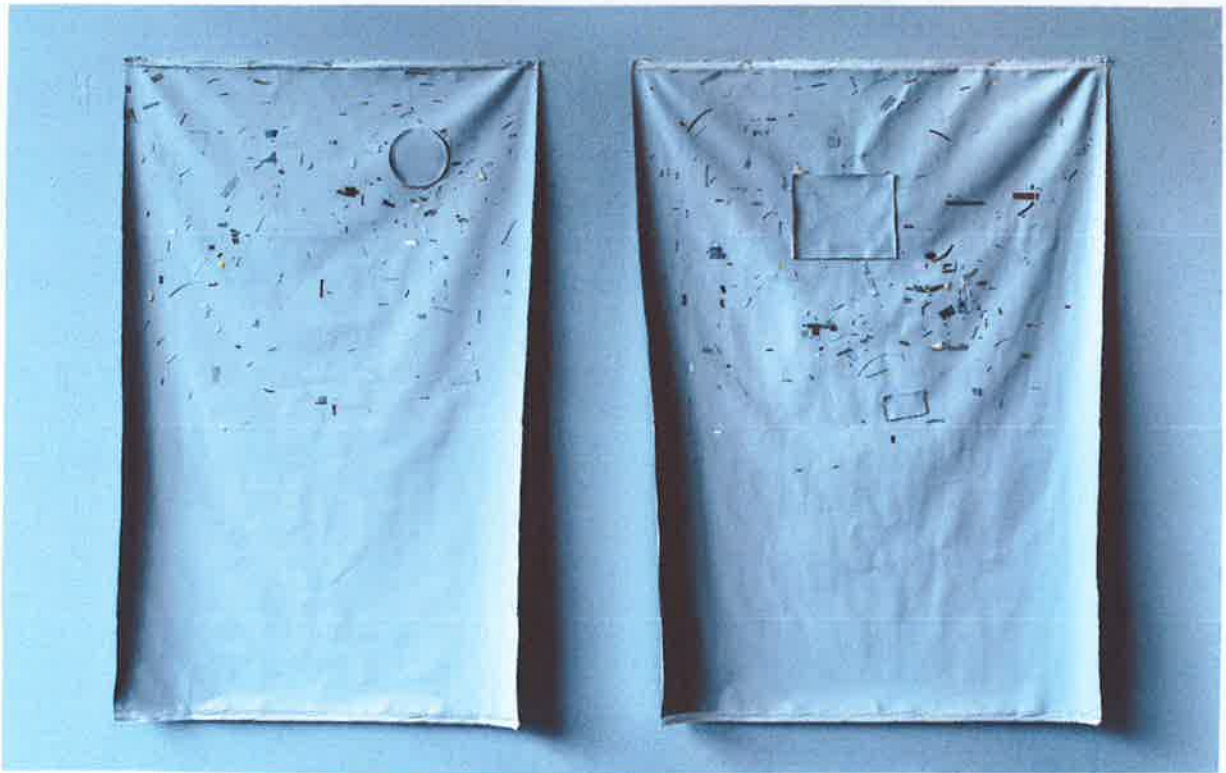


图2 《風景 #26》

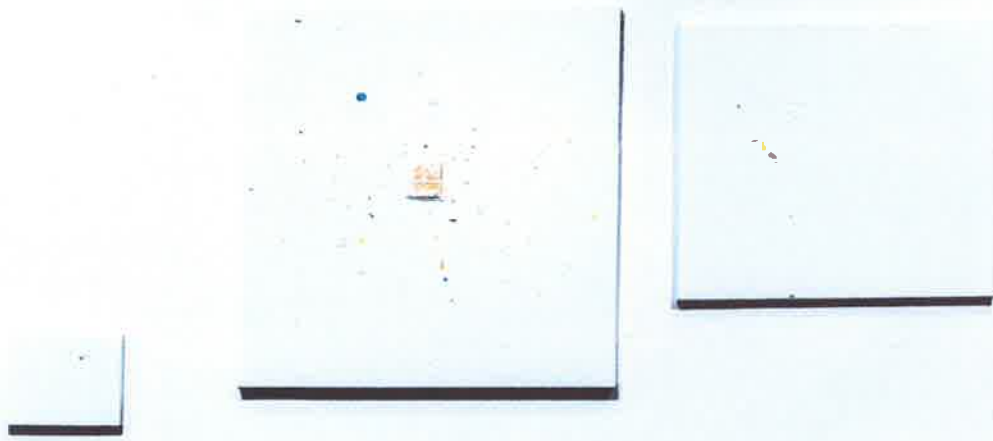


图3 《風景 #28》



图4 《風景 #25》

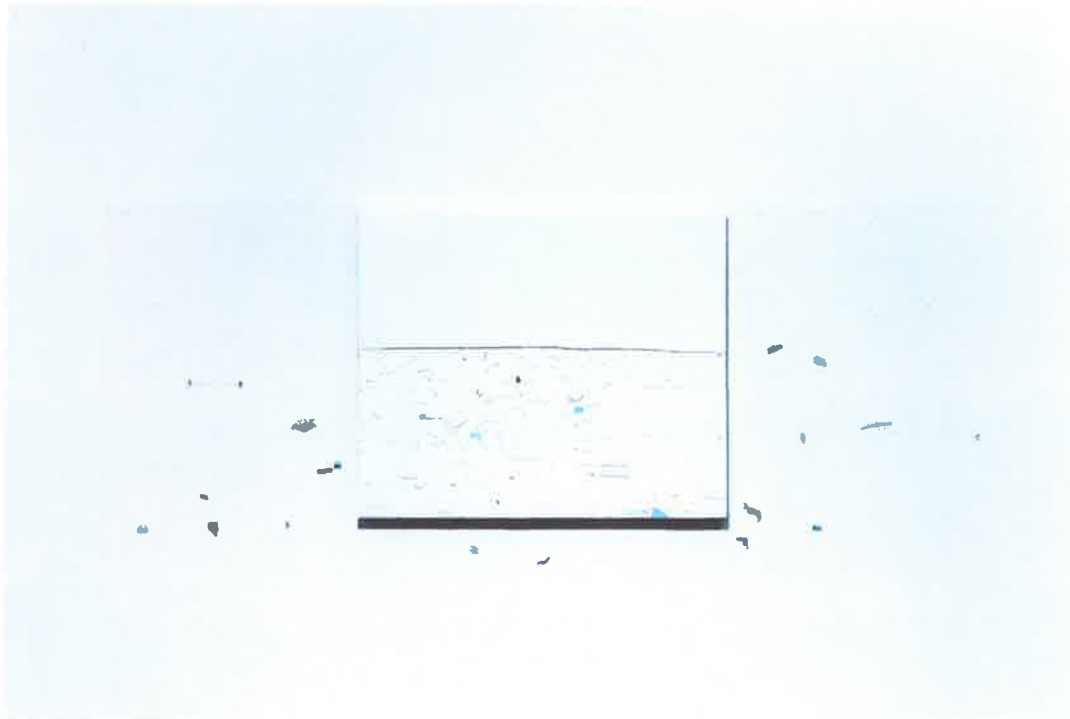


图5 《風景 #31》



图6 《風景 #27》

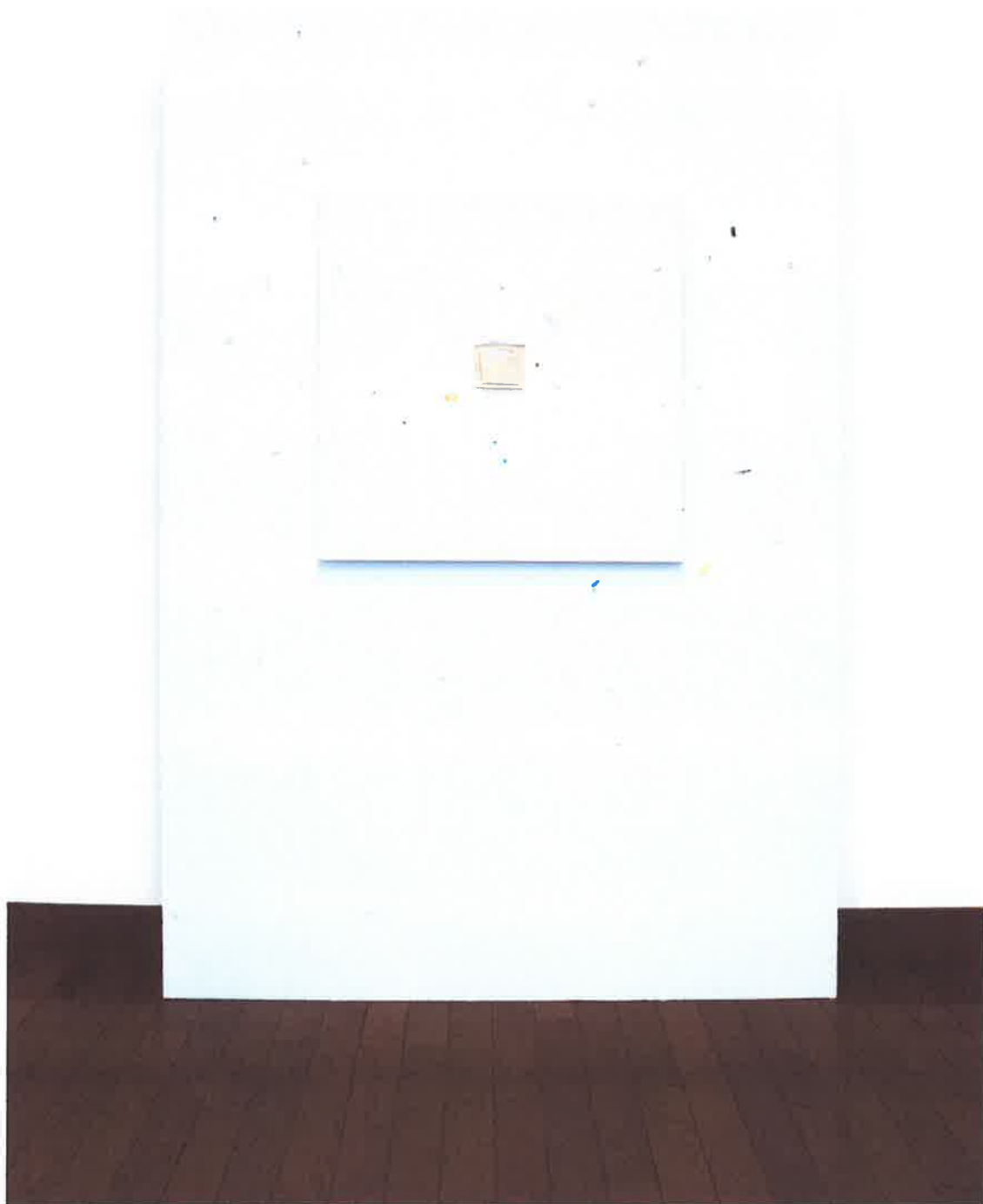


図7 《カーテンウォール》

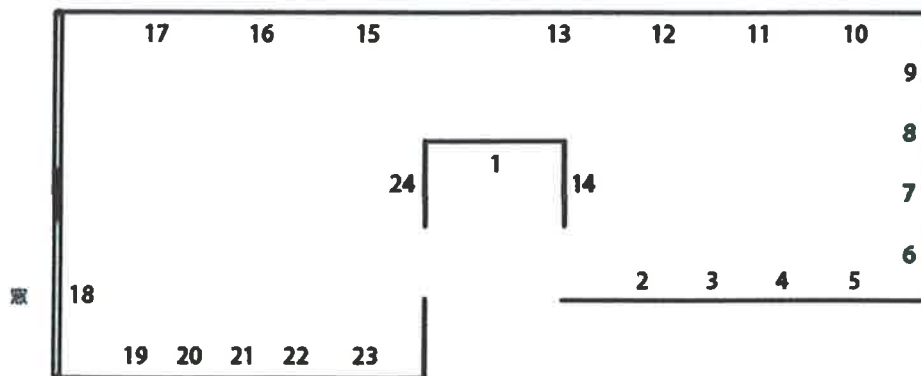
GM-Vol.140

千原真実個展 風景、片鱗

2021.6.12 | 土 | - 8.22 | 日 |

熊本市現代美術館 ギャラリーⅢ+井手宣通記念ギャラリー

主催：熊本市現代美術館 [熊本市、公益財団法人熊本市美術文化振興財団] 助成：熊本放送文化振興財団



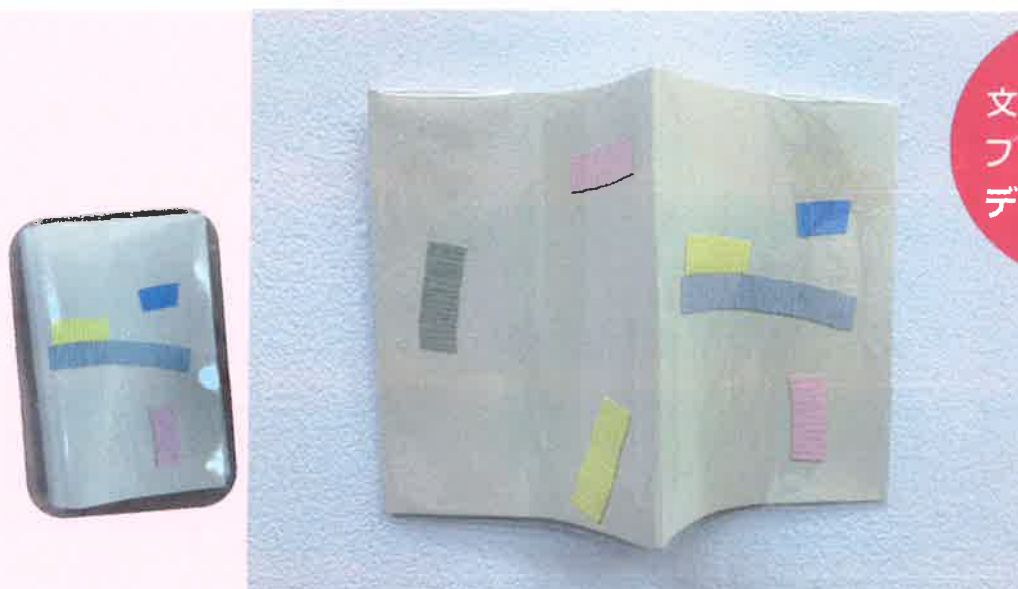
\*すべて作家蔵

No.	作品名	制作年	材質・技法	サイズ (縦×横×奥行) cm
1	風	2020	ミクストメディア、コラージュ	50.0×55.0
2	風景 # 22	2021	ミクストメディア、コラージュ	72.8×91.0×4.0
3	風景 # 23	2021	ミクストメディア、コラージュ	1350×970×30
4	風景 # 24	2021	ミクストメディア、コラージュ	91.0×116.5×3.0
5	風景 # 20	2020	ミクストメディア、コラージュ	22.0×27.2×3.0
6	風景 # 5	2018	ミクストメディア、コラージュ	42.5×45.5
7	花びら	2018	ミクストメディア、コラージュ	60.0×64.0
8	風景 # 8	2020	ミクストメディア、コラージュ	60.0×90.0
9	風景 # 7	2020	ミクストメディア、コラージュ	46.0×55.0
10	風景 # 29	2021	ミクストメディア、コラージュ	28.5×29.5
11	風景 # 31	2021	ミクストメディア、コラージュ	73.0×184.0
12	風景 # 28	2021	ミクストメディア、コラージュ	138.0×232.0
13	風景 # 25	2021	ミクストメディア、コラージュ	694×1440
14	Surface # 1	2019	アクリル絵具、コラージュ	18.0×20.0×3.0
15	風景 # 21	2020	ミクストメディア、コラージュ	18.0×20.0×4.0
16	風景 # 27	2021	ミクストメディア、コラージュ	144.0×70.0
17	風景 # 26	2021	ミクストメディア、コラージュ	(右) 144.0×105.0 (左) 144.0×91.0
18	風景 # 1	2018	ミクストメディア、コラージュ	98.0×110.0
19	風景<ドローイング> # 1	2020	ミクストメディア、コラージュ	42.0×29.8
20	風景<ドローイング> # 2	2020	ミクストメディア、コラージュ	42.0×29.8
21	風景<ドローイング> # 8	2020	ミクストメディア、コラージュ	42.0×30.4
22	風景<ドローイング> # 3	2020	ミクストメディア、コラージュ	42.0×29.9
23	風景 # 30	2021	アクリル絵具、コラージュ	30.0×40.0
24	カーテンウォール	2021	ミクストメディア、コラージュ	180.0×121.0×21.0



千原真実個展「風景、片鱗」関連イベント

## コラージュ・ワークショップ つなげてつなげて・・・“カラフル・ライン”！



文庫本サイズの  
ブックカバーを  
デザインします

コラージュの面白さを体験するワークショップ。小さなキャンバス片をつなげて「線」を作ります。カラフルな線をキャンバス布にコラージュして、最後は文庫本サイズのブックカバーに仕上げます。

日時	2021年8月22日(日) 14:00～15:30
場所	熊本市現代美術館 アートロフト
参加費	600円/人
定員	15名(※事前申込/先着順)
対象	小学生以上(低学年のお子様には保護者1名が要同伴)
持ち物	カッター、はさみ
講師	千原真実(本展出品作家)

**お申込先** TEL 096-278-7500 (熊本市現代美術館)

\* 三密を避けるため、付き添いや見守りは最小人数でお願いしています。

ギャラリーⅢ  
G3-Vol.140

## 千原真実 個展「風景、片鱗」

会期：2021年6月12日(土) - 8月22日(日)

EXHIBITION

熊本、九州ゆかりのアーティストを紹介するギャラリーⅢでは、千原真実さん(熊本出身・神奈川在住)の個展を開催しています。作品制作についてお話をうかがいました。

—千原さんの作品は、着彩したキャンパスの小片、生地や写真、セロファン、糸など、非常に細かいものが画面にコラージュされています。コラージュという技法を選んだのはなぜですか？

はじめは、キャンパスの小片を複数つなぎ合わせて形を生み出すことを試みていました。筆で描くと滑らかな一本の線が、キャンパスの集合だと独特のゆがみ、凹凸を持ちます。筆で描くことではできないものが多数見つかりました。次第に、キャンパス以外の素材も使うようになり、配置の仕方にもヴァリエーションができました。私はコラージュの、素材ひとつひとつの物質としての個性が発揮されつつも、ひとつの「絵画」として成立するという両義性に注目しています。また素材は移動することができるので、「異なる環境に置くこと」という意味も見出しています。

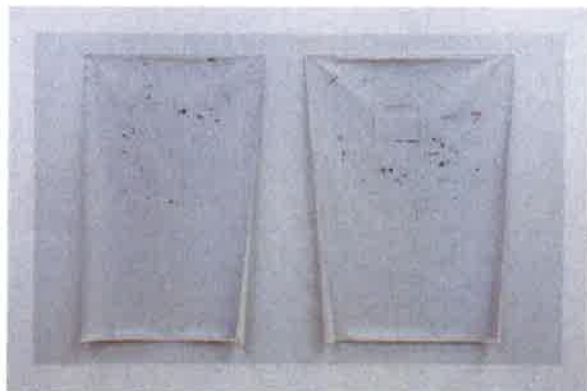
—近年、千原さんが制作のテーマにしている「絵と絵のまわり」についてもお話しいただけますか？

ブルーノ・ゴラー(Bruno GOLLER, 1901-1998)という人の作品との出会いが、「絵と絵のまわり」ということを意識したきっかけでした。それは、風景画のまわりに大きく余白が取られた作品でした。そこから、フレームや壁といった、絵画と地続きのもの、同時に存在しているまわりのものへ意識を向けるということが、制作の上での問いとして浮かび上がりました。出品作の《風景#5》や《花びら》は、フレームのようなものを付けた作品です。今回の展覧会では特に、「壁」をどのようにコラージュするか、ということの問題として扱っています。



《花びら》2018年 作家蔵

—「壁」は作品を掛けるために必要なもの、絵画鑑賞のための「支持体」なわけですが、その考え方を解体し、作品と同時に意識を向けてみるというコンセプトなわけですね。既存の壁以外にも、作り物の「壁」を使った作品も出品されています。



《風景#26》2021年 作家蔵 ©Mami Chihara

これはカーテンウォールという「非耐力壁」がヒントになっています。壁ではありますが建造物の一部ではなく、造物物なので、「移動可能な壁」と捉えることができます。移動できるので、コラージュの素材と同等であることがより顕著です。

—各パーツ、キャンバス地、壁といった構成要素すべてが等価な存在である、ということになりますね。タイトルについてもお聞きます。ほとんどが「風景」という作品名ですが、これらは特定の場所や眺めを指しているのではない、とのこと。

はい、実際にある風景の再現ではありません。絵画世界の中に「風景」を作っている感覚です。日常、自分の視界のまわりに存在しているものを知覚し、それが私の記憶の中に蓄積されていて、各造形のきっかけになっています。それは「風景の片鱗」と言えるかと思い、今回の展覧会タイトルにしました。風景の片鱗がひとつの絵画世界だけの「風景」へと置き換わっていくのです。

—見ているものまわりにあるものも同時に、というのは「絵と絵のまわり」というテーマと相似します。また構成要素の等価性について触れましたが、モチーフも同様に、千原さんの記憶のデータベースのなかで等価になっているようですね。

そうですね。ばらばらのものが同時に存在できるのが絵画だ、と考えています。

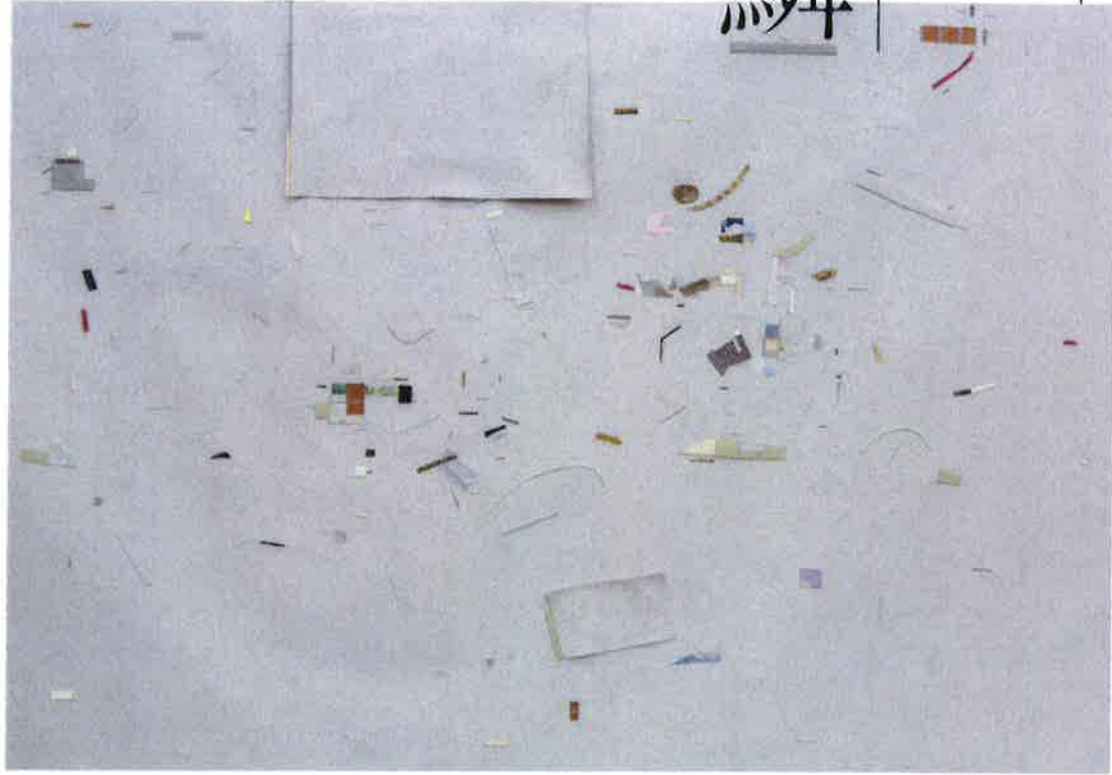
熊本市現代美術館  
Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol. 99 (2021年7月) [次号は10月発行予定]  
編集：佐々木玄太郎、池澤茉莉、岩崎美千子、柴垣美帆  
デザイン：内田直家 発行：熊本市現代美術館 www.camk.jp  
〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500



[来館者の皆さまへのお願い] 新型コロナウイルスの感染拡大を防止し、美術館を安全にご利用いただくため、ご来館の際には手指消毒・咳エチケットのご協力をお願いいたします。また、発熱・咳・くしゃみ等の風邪の症状がある方は、ご来館をお控えください。

# 風景、 片鱗



千原真実 展

6/12<sup>2021</sup><sub>|土|</sub>—8/22<sub>|日|</sub>

10:00—20:00 火曜休館 [入場無料]

会場：熊本市現代美術館ギャラリーⅢ + 井手宣通記念ギャラリー

主催：熊本市現代美術館 [熊本市、公益財団法人 熊本市美術文化振興財団] 助成：熊本放送文化振興財団

「千原真実個展 風景、片鱗」：決算

収 入		支 出	
内 容	金 額	内 容	金 額
助成金収入（熊本放送文化振興財団）	100,000	展示室復旧（壁塗装）のための業者委託費	100,000
熊本市現代美術館指定管理料	382,329	交通費、宿泊費	50,068
		広報チラシ等発送費	7,286
		展示・イベント用消耗品購入費	6,820
		広報用A4チラシデザイン・印刷経費	143,000
		広報用B2ポスター印刷経費費	7,700
		作品輸送、展示、撤収作業費	144,100
		作品保険料	23,355
収入合計	482,329	支出合計	482,329